

田中九蔵本陣絵図—田中七左衛門本陣絵図と比較して—

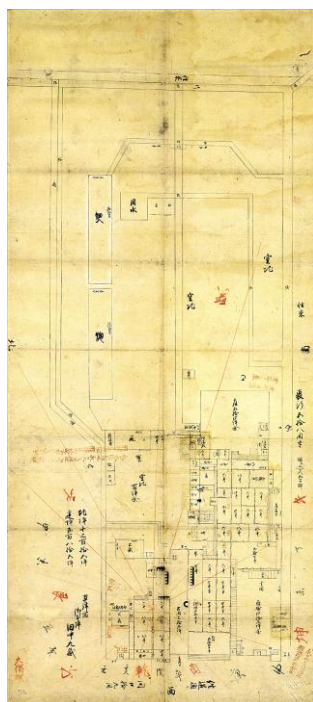
江戸時代の宿場には、旅行者の休泊に備え、様々な施設が置かれていました。そのなかでも、大名や幕府役人など専用の休泊施設を「本陣」といいました。当時、草津は東海道・中山道の合流する交通量の多い宿場であったため、「田中九蔵本陣」と「田中七左衛門本陣」の2軒の本陣が置かれていました。

現在、田中七左衛門本陣は、国の史跡「草津宿本陣」として一般公開されていますが、田中九蔵本陣は残念ながら明治以後に取り壊されてしまいました。しかし、その屋敷の構造は、残された絵図によって知ることができます。

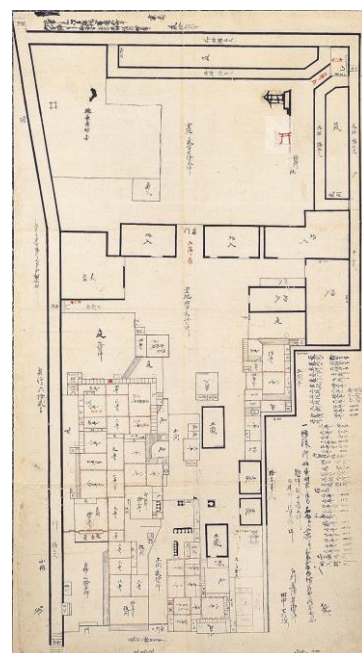
Aの絵図は、作成年代は不明ですが、田中九蔵本陣の間取図、Bの絵図は、嘉永2年(1849)に作成された田中七左衛門本陣の間取図です。このような絵図は、本陣の主人が作成し、休泊の準備に訪れた役人に渡され、本陣における警護や従者の部屋割りなどのために使用されました。

2枚の絵図を比較してみると、Aの田中九蔵本陣は、右側に休泊のための座敷棟、左側に本陣職を勤めた家族の住居棟を配した構造となっていました。Bの田中七左衛門本陣は、この逆で、右側に住居棟、左側に座敷棟を配していました。2軒にはこのような相違点ありましたが、それぞれ座敷棟には、街道に面して表門、荷物置き場の板間があり、その奥に座敷や大名などの主客専用の部屋である上段の間、主客専用の御湯殿、雪隠(便所)などが設けられていました。また、屋敷裏手には、非常用通路である御除道があり、敷地の周囲は堀や高塀で囲む構造となっているなど、2軒とも本陣に必要な設備は整っていました。

天保14年(1843)に、東海道の宿場と街道筋の村々について調査した『東海道宿村大概帳』によると、東海道の本陣111軒のなかで、田中九蔵本陣は7番目、田中七左衛門本陣は2番目の規模を誇り、全国の本陣の中でも最大クラスのものでした。これは、東海道と中山道との合流地点にあった草津宿が重要視されていたからではないかと考えられます。



A 田中九蔵本陣絵図



B 田中七左衛門本陣絵図